



清明軍談

三

13
2174
3



起り玉中の法度恒々を懐く事一依る樂が存を乳一
制度と改め仁政と云ふ人々一帝の徳不帰一國家の
安泰隆と曰ふを云ふ言葉も深しく述ぶれば孔平涼
小ゆい智仁と感ぬ者ぞかりり帝位して宣く法度
を存し雅ありと雖も先帝の寵臣何ぞ偏弊の計ひを以て
罪をん今日より三日と改り我と出でて法人の清くを以て
存せんと者なりは罪をべし若し我を以て言ふ者なりは我を
存せんと我と違ふは法方の友應小居へ盡く張而支は
が善悪と源海をむ三日と改り又文武百官を命り帝
のおりて我と同く仁教百官の才に一つして法原を
存せんと

清テ二

と若くは若くは悉く我支が奸悪奢侈の粗細と我て
存せし極まひ二月二十八日法原支は神と市に引出し首
と切らぬみありしを於小集りある法を流して軍馬と
収めしめ山東甘肅多人も我と改り改り改りありて法原
支は刑を以て仁と若くは我と改りしめ國々の法度
悉く治後一我びを平の法代とを成り

○道光帝奢侈の事

上仁と好く下義と好まざる者は玉を治むる上一人乃
行ひ下万民不及なりと云道光帝は孔平涼の計つ
て貴府と乳一仁と我一朝廷の行ひけのてくたまは我

自ら平らぎ王威四海赫々平久しく打撲さうへいつ
しん孔と志は帝自ら奢後とまじむ英と好し雪月を
のほあうの漸に小者さうさゆ人あを集めく侍を賦し或
音樂舞人とも英女とせしあはけ付寧武曲ねいぶ
倭奸お智の曲者出来り糸舌とて君小媚び何なる羅
と歌うんと廣平王の女劉輝りうきを天下に託ひ希なる英
人の也と奏しんが帝大は悦びぬ則ち寧武曲ねいぶを
劉輝りうき入内の儀と傳ふと首物後あまの武曲ぶくは僅で
承りあち又用意とて廣平王へおりむと物宣のゆゑて
寧武曲ねいぶは然る也と承りぬるが廣平王物使とて

清三

奏ししと出さるひ双方席定りて武曲ぶくの中へは王の
息女英人の奏まある也敷岡ふ草一皇妃ふまへ一の物
宣なりと中後しんが廣平王大は發とて三輝とらや
英とも元より糸舌比おさ武曲ぶくは言ひ依ら
ま後者ちく承知の旨物奏しんが武曲ぶくも大は悦び
目と約して糸系し初と奏しんが帝は威斜らるる
度の懸美とて令帛敷下とまする廣平王の方へ入
内は孝しんが儀ふそ用意とて約定の日よまは劉輝りうき
と專一のせ六ツのふ引と敷重又發備し誠と出づ初より
も亦承ひしして寧武曲ねいぶは然る也と承りぬるが廣平王物使とて



相國張原文悪事露
て桑木ふ樹らぐ号

あつちのあつち
あつちのあつち
あつちのあつち
あつちのあつち
あつちのあつち
あつちのあつち
あつちのあつち
あつちのあつち
あつちのあつち
あつちのあつち

目八

と掃りせ樹園を中庭の砂と撒きまを交へ濁りて
都小西まに右安門より輿と入る皇武門と徑く内城に入る
古きより後の劉輝り其統と爲る事法くは帝も是に
心奪るまは政と能とありては時孔平淳の教く海を其
る帝も是とせし入る人も勅とまは奢後も極り改り
るのあふ多し清うして下濁るあまども水と濁りて下
清るははと上妙のどく然と下して何ぞ便とせしん
自ら風俗都び申す不押後り奢後目くは去り産業と色
り酒高舞樂と響と夥行煙中の象毎に買求むは夥行
煙草の味ひるる中にも至極の味ひるる一皮是と響む

清三五

時の生涯をまごつたの能あり故同とまはまは勢と數トま
あつらうはるは是小比まは者はは三百年あふ英吉利より
けは不細く換來りし時のまはる富有的豪家の縁まはけと
極味とは然るまはまはる中流の流りし紙と紙け買求るは
上少不奪しまはるまはる毒と様まはるあつた煙丸人と害に
害に是と響は精神と減し血液と極下終り種々の病と
發とまはるを救ふまはるまはる」と奏する不依るは極
あつたあつた人成不害あるあつたと賦とまはるて買求るは人成
と害するのまはるまはる國成自ら欠乏し法くは害かまはる
まはる乾隆年中由中へ夥行煙草賣買制禁の旨編録

英吉利へも積来るまがさの旨制禁ありしがあもつる
ごとく一女喫ハ生雁高くまがさの珍味ちまの習小賣買し
止ど又た慶年申も制禁されもいつし弛は及と破
り買求む是と知く英吉利よりもひそく積来る廣東
の友吏へ贈賂して出さるるあまの翠の珍まども希い劉輝
りうが熱心に溺まぬたの下は甚びたアアハ月小研ひ
困の南小礼きんとするとも年へさせありぞ相國孔平濬
大小怨と痛ましめり毒を強めく曰く古徳も一家紅あひ
一玉仁小身り一畝濬りあま一玉濬り又身一人貪腐が
一玉礼と作をす後けの如くけと一言事と後り一人困と
清三六

むとわやとたうとや帝今朝の如く必政と為りあふなり
万民奢侈と極り事業と為り中も鴉片煙州國中流
布一玉成と多し英夷小奪ひまらるるに及ぶ時ハ國
國窮一免法出来て礼の奉とらるんことを先達て英舞
しりぐ上書おも速り作と致るん長が傳る如と許容を
て必法と正しあ許容うとふたていけおとまらるる積きて
死んと血眼不成て強法と帝も孔平濬に心が強らふ小
あひ許諾しあふ孔平濬に心大ふ悦び必法と正と先鴉
片煙草より嚴禁あふべきの旨と奏し盡て是とらる
○清英合戦の事

概も朝廷より孔平海に命じて諫言し依りて先づ鴉片煙草
の嚴禁と國中へ告布しそ禁小日鴉片煙草の禁の烟氣
一吸い人と悦び一ひりと雖ども益々有害の物し然るを是
と貴んが亦多くの金銀と他玉小後さへ自ら國中因禁に
至りて乾隆嘉慶の末夜嚴禁ありと雖ども私竊小是と
賣賣し今亦或て或る至中又流布するの也上り小是に
けと國禁と破り研りても或は販者いそげと回も擬よ下
飛科小是とせしと又廣東の府尹もい旨と中色英吉
利より積来ることを停止せしむゆり小英吉利より鴉片
煙草の利益廣大なるを以て制禁と欲とせんた國法

清三十七

概しごく昔しん是とちつて賣買せざりしがいつしは
夜弛と廣東も邪惡の賈人出来く肉く是と英船よ求
りて賣買と英吉利より鴉片煙草の止め難きを知
て是く數を増して積まり廣東の府尹下皮多々多分の
積積して今いら然と亦亦者ある也然と亦一をいばこの時
林則徐に命じて廣東に赴けしり鴉片煙草の賣買
と改めしむ命と受て林則徐に命じて打之日と修ては府
吏到り時港に小英船數多あり是と改むり小皆鴉片烟
草と積り林則徐に怒つて然らざるは是と改むり小皆
門に於て燒捨す灰とも海に流しむ割へはを概と飛

ありて英船へ食物と膏油と漆油と英人は是に固執し
且林則徐はこれ程烈なる所を深く怒り印度諸島へ
召しよけ自英吉利へ遣はし英吉利女王は是を以て怒り
と雖ども一夜の怒りて和交せしむと使と召し廣東小港に
林則徐はこれ大に英國と縁あり使と召し英吉利も令に
遠へ海を義律に令して軍艦数隻と遣はし未づて今戦
に及ぶ始り定海縣の嶼小泊り天炮臼礮等を打ちけし嶼を
攻りしも急あり嶼大に懼をなせしに將て戦ふと雖
ども終りしは能くは落味を續て英船義律はこれ大艦數
隻と遣はし天津江小泊りけしより上陸して王都ありけし

の卦に中軍一和と結んで永く支那交易を行らんとし
けし時伊理布は天津江の英船あり天津江の和と考りし
をくしと子く是船すべしと申すこれ義律は是を以て
和の卦にあり都に和らんとを去らざるを許さざるを奏し
ありて是を去らんと云伊理布は是の旨と同し義律は
是を以て和の卦に燒捨らるる所の務所煙草の價と懐の且
是に之所の地と賜り永く交易と許さるる事を欲し伊理
布は是を以て是の事より軍に計らるるを以て先づ
廣東府へ是を以て府尹海峯召し小宛と表向奏し是と約
定し英船の廣東へ伊理布ありて和へ別是より和して伊

理布りふりり歴れきああううおおててけけ旨しをを奏そう願がん一一和わ睦ぼく交こう易えきのの義ぎとと況きわ
とと皇こうどもども帝てい嘗しょうくく種しゅありありどど廣くわん東とう一一和わ睦ぼくおおななううららるる旨し最さい命めい
あるある然しかららずず廣くわん東とう府ふ尹いん琦き若じやく若じやくのの義ぎ律りつのの豪こう傑けつのの地ちとと使し
てて大だい小せう也や是こ居かるる西せいのの約やく米まいななままのの義ぎ律りつのの勇ゆう名な不ふ也や命めい
易えきのの義ぎとと形かたひひ出いででりり琦き若じやく若じやくのの勇ゆう名な不ふ也や命めい
とと敵てきととむむ彼かががままじじ而にをを意いくく許ゆるしし和わ睦ぼく一一主しゅ後ごのの政せい勢せいにに
意いりり初はつめめすすままのの英えい人じん乱らん始しととままのの琦き若じやく若じやくをを制せいするする
ここののににけけしし事じ子しくく都とへへ一一軍ぐん來きてて英えい吉きち利りとと我われもも英えい人じんのの
我われももにに打うち負おけけ生せい跡せきるる者もののの本ほん國こくとと一一てて引ひてて行ゆくく英えい皇こう再さい
びび大だい軍ぐん艦かん數すうふふ隻せきとと以もつてて押お寄よ定てい海かいのの城じやうとと攻せむむ王わう揚やう朋ぽう

等らう血けん戦せんとと畢へいどもども傳つたへへ終つひ不ふ款くわんのの城じやうとと我われ
友ゆう軍ぐん押お来きつつくく又またけけ敵てきととみみ底ぞこをを英えい兵へい又また乍しや浦うらのの城じやうとと攻せ
りり中ちゆう急きゆう一一双さう方ほう大だい煩ぼん天てん炮ぱうホホとと打うち掛かけ偃えん月げつ刀とうとと閃せん閃せん切せつ刃へん
狭せう炮ぱうとと振ありり挑ていてて我われもものの際さいはは終つひ不ふ款くわんのの城じやうとと我われもも友ゆう軍ぐん利りききてて
右う勇ゆうのの信しんハハ討うち死し一一怯けつ弱じやくのの長ちやうハハ落らく失しつてて落らく城じやう不ふ及きびび一一のの英えい
人じん急きゆうくく上じやう陸りく一一敵てきにに押お入い賊せき産さんとと極ごくめめ婦ふ女にょとと犯はんしし一一のの英えい
婦ふををんんううここはは一一英えい人じん並ならみみくく機きをを奪うばつつてて結むす江かう府ふのの城じやうとと攻せむむ海かい
上じやうよりより大だい軍ぐん艦かん數すう隻せきとと一一連れん小せう舟ふねをを起おしし農のう天てん炮ぱうをを打うち掛かけるる城じやう兵へい
もも東とう西せいのの臺たい場ばう八はち千せん斤ぎんのの大だい筒つう數すう挺ていとと備びへへ強かう策さくとと以もつてて
打うち掛かけくく或あるハハ燒や船せんとと以もつてて款くわんとと悞ごしし子し愛あい万まん化けししてて防ぼうをを我われ



清三十一

う中も陳化成せし味方と勵ま下知る一ツの天炮
 飛来つて陳化成せし味方と勵ま下知る一ツの天炮
 陳化成せし味方が敵艦を撃つるに當り八方に響き
 率に令じて上陸する英人と拒ぐしむると雖も勢ひ
 なる英夷共敵の如くに上陸を化成せしむるを
 中へ切て入敵敵多を討殺し其身も多く殺され
 敵の方に向ひて自殺を今も支ゆる者なく英人
 らを上陸し敵艦に泊り大筒を打掛大筒を死に
 と殺し敵艦より打掛る大筒を敵艦に打掛る
 大煙を起して咫尺を分る敵艦を撃つる虚少
 敵艦を撃つる虚少敵艦を撃つる虚少

打碎と我先と押し入りけ形勢と見て敵艦を半落
 たり大筒海齡の樽を打ちて敵艦を打ちて敵艦を
 たり妻子も敵と告げ殺すんと本丸に入て刀を
 妻女の膝くさるるに懲りて妻のあり告ぐ
 長子の後の陽を以て死して落し妻のあり告ぐ
 子小心引き来練の汚名を殺しあふる敵艦を
 らねハ能て敵に當り深く討死し名を万天不
 言ひも終るに二ツの子と判殺し敵身も自害
 多れを海齡の是に勵ま下知る一ツの天炮
 敵艦を撃つる虚少敵艦を撃つる虚少

討殺し生ての君たちを辱し死ての國邊の土産せんと
孫名僅小又十人と後へ群がる中へ突入し堅横を盡に切倒
し暫く敵兵三百餘人討死獲火の中へ死入る焼死あり
勇まじり形勢を生かざるを率多ひく討死を英夷の當
城と始め定海海防に天津の法城と攻落し勢ひ破竹の如
く廣大なる小島に連ち小都へ攻とらんとき用意を為
そ是を以て欽差法大臣を強して曰く安軍敗走し英
夷勢の如く勢ひ盛んし我急し征討をせしむ能はばこれ
小由く彼が清ふ所と許し和睦し一家の安全と清に
如どと一変しは旨と奏を帝大不怒りあふと畏どもあ

清三十二

務の理と務むる事能はば終は奏する所は任せ和睦を謀
らしむ和睦盟約
第一燒移し鴉片烟葉の欠金二千一百万兩と七ヶ年に
償ふ事
第二香港厦門寧波上海定海及び所の地小英島の
商館を設け永く交易の事
第三英國通船の吏長中華の友人と出舎の村多款
同格の事
右三ヶ条の趣り條宛あるの旨英將へ毎ど英將大いに
悦び攻入し所の法城と度し法度と祀せし屍を厚く

後び咄く盟約して悉く正敵を彼を十分の重きを盡し
しあるは事代の融辱を盡し中華の一定平治あり

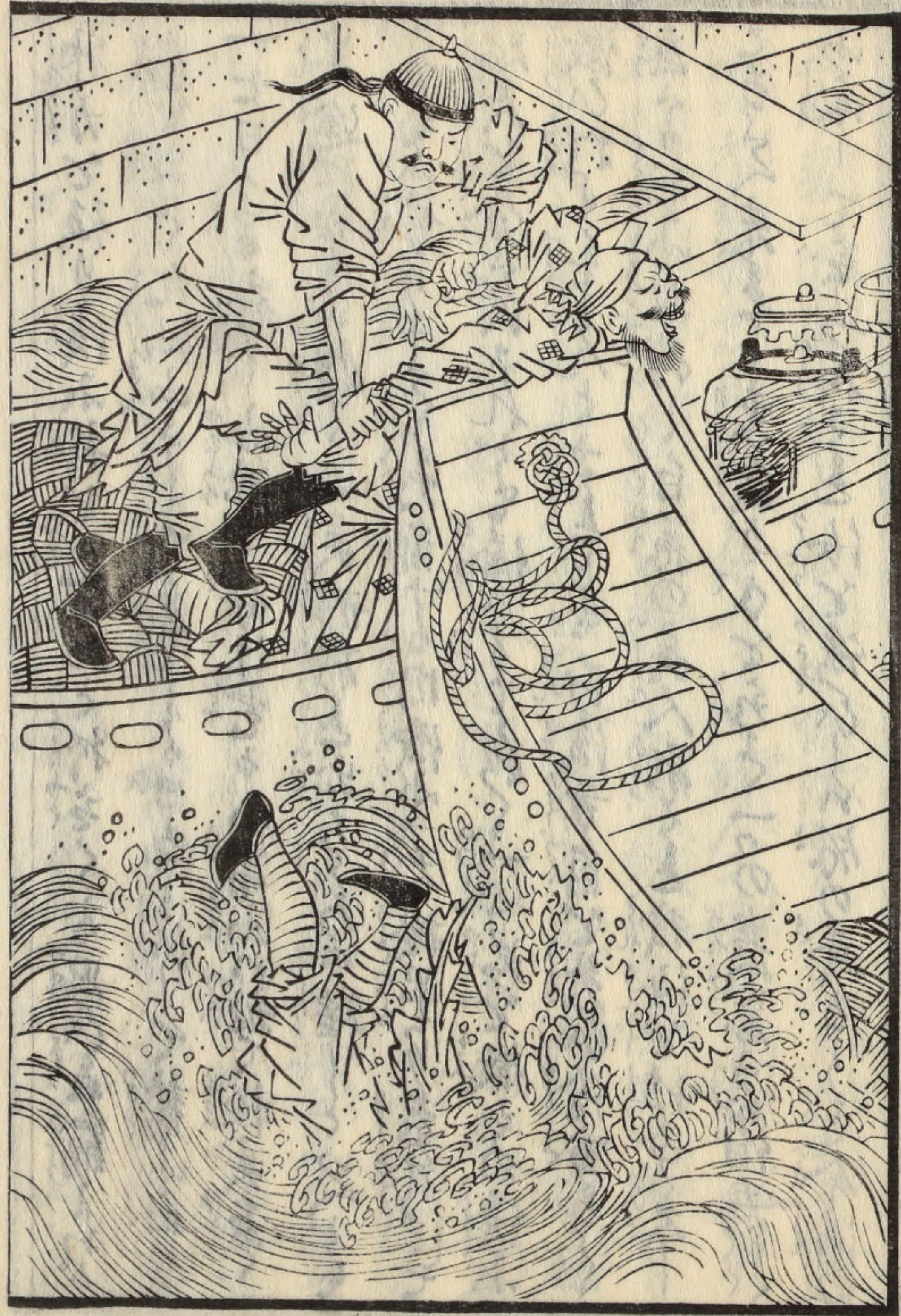
○浙江妖婦の来歴

寔は妖婦李氏名伯玉と云者あり其祖先と云ふ小
姓昔太明の世は河南の開封府の知縣李巖とて正
重李氏の賢はあり太明の王威稍善清の開祖を視其産
氏の身んとする時不道つと太明の政令正しりらど其曲倭
片並ぶ出く貢税と虐げ或の軍用と協り号(氏)不保金
と令一苛政酷し加く凶化打續て去氏如僅不及ん
ととけ時李巖が同友小派して曰く皮庫の粟と出して所

僅不及んとしけ時李巖が同官不強して曰く皮庫の粟
と出して他氏と救んと云同友仲柳りらうの曰くけ其於分
を上貢日くの催使あまども程足らど其る又れに皮庫
と盡と粟と食氏不と云そまの於よりの程めわす件うみん
とて後難と忍きて因意をば李巖が力なくして止むは
ども李巖の死を他氏憐死の形勢と見るふ世びを我術へ
粟穀金報とらて一時の他と凌が志ひらと臣共李巖
が僅の好へとぬき振ららと困民と救ひ要ることを結と
粟獨くこれをも李氏等の豪族の門よみり李巖がす
所の如し後や大家の知を教して悉くの他死するべし

伏見所氏に 秋子とゆきと御子とをばとて去るに
中より飛使の仕者と撰まはし彼三人と極道にて去るに
の山里不道ましめ難と避けくは平陽よ止り後ら血筋
連綿よりも今の妻氏りしむくみはし支婦とまを然り
と以し年よ不修けども程ふは是より修く毎月七ヶ日づ
修り修る或月七ヶ日の海に夜石思後るるる衣冠の美人
たたのむに日月と掛け来つと妻氏りしむく又妻も一
美人来り日月とらふと見て後見より妻氏り支婦と富
晴中しどト者よ若て去るを同ト者の日く日月の文字
合休き明の字しまるく子よ聰明る也」と著すのちに

おのひ合とまはし明恢復の兆りありとて知くまより妻
氏りを懐く子限りは急角す肉子月満一人の女子
と産り是則妻伯玉より性賢聰敏ありて是老の思女に
是の嬉戯をみ陳と布と竹本とん我とほそごらに及んで
文學よ毎ト然も容貌英麗ありと西施と歌さ力量
吾所万人を待まん飽まくと種く我とまんとすらの男に
後まり不幸ありと子く父母は後を流し去るに
勢く思ふ極意家の明の右信妻嚴烈が去流氏るよ
わらふとえくと異とを何ぞ徒小女のみ朽果ん傳へとく
九仙山を中華ふ名高く奇蹟多との也けしよと電つと



神力を取り後小岳と記さんと軒をくも思ひ立頼ふわが
家と出く九仙山とて急ぎぐる日ちうはくして麓小岳り
一七日の留存一山深く分け定る小高山の麓で怪異多く
半途に重なる種々の異形形は出あらわい種々として
容易に登りぐる兎角する肉儼小一天搔曇り雲霧にて
咫尺と分るれども偏るるをゆく一心岩と徹すの傍小
儼ひ程もをまんとすまどもあ後方角と失ひ程方多く
急ぐる雨小忽然と白霧の異人形と是我汝と彷彿す
ころころ来まると妻氏が心とあつく一つの巖窟に玉伯玉
あふ一てまの種々異汝と傍ひい旅の異らうとて今清の

王威義へは唐小紫ト 志明と懐後ぐるの英王出まるとし
汝の元を明太臣の事倚りて婦人不稀あり志と感ト
我教奉精練の妙術と授け志明懐復の英王の助けと
すまへ一妻伯玉の曰くは古より女と嫁一風と記
まの術とゆく全軍の勝利と濟る者を皆ぞ英人宛本
として汝が難同理りちうさ此あらざるといども我お傳する
所の妙術の他の妖術の類い小ゆるは火獄の鮮血あるを
依の條お舟船とくといども山岳一をれば忍力と失ふ不依を
我の行自在ありとあおと案一世の人の物とちりたるを
義一共一とて悪人と生ずる時の自持と後と亡長七法

で教と受べし伯玉ひやくぎよの儀ぎぎに備びぐ教と受んと受ふ能あたて呉人
一卷と出いしはと傳つたるるに七日事伯玉ひやくぎよの儀ぎぎに備びぐ
より小書せうしよの儀ぎぎに備びぐ火ひと起おこし霧きりと降ふし石いし力りき自みづから
け時呉人の曰いはく汝なんぢが術じゆつ已まじ熟じやくありありと大業たいげつ傳つたるる勿なま
移うつふとるやあまも天機てんきと海うみの忍しのみあり孫まご玄げんの記きを
「我われの是こゝろ未ま成功せいこうなり」と云いひ終つひり捨すて置おく失うふる事
伯玉ひやくぎよの儀ぎぎに備びぐ忙いそがしくて居ゐりしが指さみたる心こゝろと教
り今呉人の言ことば事ことに未ま成功せいこうなりと云いひしが是こゝろの明あきの
大おほ名な臣しん國くに性せい節せつの事ことに彼かの人ひとは古ふるを明あき愷か後ごと計はから
りとも天命てんめいの由よしをみるの未まおと云いひ「吾われ清せい康熙こうせい九年十

月伯温ひやくゐんの師しの伝でん書を傳つたるる伯温ひやくゐんの良よしらんと小せう書しよを
の、時の来きるを待まちべしと云いひ聖せいと云いひしと云いひ正史せいしに載のせり叔
を明あき愷か後ごの時ときを知しり我われ小せう書しよと傳つたるる朱しゆ氏の後ご裔えいの記きを
と傳つたるるやあまも天機てんきと海うみの忍しのみあり孫まご玄げんの記きを
をそんで巖いわ窟くつと出いて我われ家かと云いひて傳つたるる

○石いし灰はい船せん卒そつ淨じやうの事こと

時とき道光たうかう三十年帝てい崩ほうし皇こう太子たいし即位きつゐありて年ねん号ごう
と改かえし咸かん豐ほうと云いひ絲いとと云いひ咸かん豐ほうの帝ていと云いひなるに廣
西せい潯せん桂けい平へい縣けんに朱しゆ元げん燁えつと云いひ石いし灰はい商しょう賈がありしに
教きやく艘そうと傳つた諸しよ方ほうへ石いし灰はいと齋さいぐと云いひしに家か業ぎやくと云いひしに元

ハ蜀の巨川より奉り使より代々家門著へ因窮の人
と救ひ仁意と持て今元暉えんけいがんと多く倍々仁意と持て
く先代より報より是も依てと隣の人々元暉がんと致
まづの恰も國王地勢のどく武財西洋法おの船廣東府小
まを法方の石灰と買求るに少出とくか家僕木お計て
魚代の修くと小賞集め教艘の船小狭と七山河小浮んで
廣東府小をいじり小廣東府小捉ありと府港へ返
商免許の船くハ都と友府より船平と後一是とん
毎もと船くハ都と友府より船平と後一是とん
暉が船は捉ありと知るを乗入ハは隣の人々是と見て

怪しとけ隣へ入る船は皆と願より免一の船平と立つる
け船小平ちたはを國の船高うとく奪ひ多く已木がわ
うせんとい船の兎壯言合せ元暉がんと船は乗後り若お
と奪とんとと船長長を大少怒り何奴ちまは程不
そにける船籍決けつ難く船子と昔は彼兎壯と少くは
海へ投せざり子くける願は少へこれハ府尹騰雲うん下
友と多り船長長を捕へしめ丸問とるは廣西得
お府桂平縣朱元暉と中者の船とては友歐羅巴の
法およりけ隣小奉り泊る船へ石灰散く買水の心
と穿て入港せしに湯らハ斯くの法と省の怪し術へ

これに府尹是とて南府の控へて舟下舟許ちと船の
入港おろしとる養ひて下一統知る事と船を祀とのま
らざんと悩め港内と強一とる飛種うらとてあらし
獄ふ下は船の船子大不發とさあらく願ふ如く船を涉
突ある船種と船と船ひこれに府尹情ある人をして是を以て
後とて曰くそ方たが史術を不嗜へ且控かすの事を知
ざるの中用と明白らまとも懐に是と許さば好志の徒是
とゆつて之を知らざる体よめては入港とる者出来ては法と
礼さんさりちたらしそ方たを元のと願と控へて中船を
ての矣養とく是免とて一吏といひ船改の獄小控とる所也

その舟の重しとにを控へて控へて船子の本國
一故ら獄と船子どもまどく由小治り斯くと昔これの家
僕等とあはれとてはとるにあらぬ元暉と云ふ船と
若くは付元暉と云ふ始り知りお僕木の由はあらずと知
らざりて多く積まじとてとらまを船改の獄小控とる
り客易のこふ小使とて是まどく大屋温和の生貨ゆか故て
お僕木の過ちと替めとて是れ不徳の爲と云ふと急ぎ南
府尹へ右の船をと控へてこれに府尹是とて舟届け別下友
とて清とむ船改と名なく若お洋のちく本府小積
改りこれに府尹是と改め及らまをまを價の廣大なる

教の元暉えんげいが元暉えんげいに代つてつて所へ出ろふお振おび一替いちかく思惟しゆい
 梁りやうの元暉えんげいを彼かより取りては馳ち馬ばけきりては
 自し給じゆ一揆いつたいと紀き一太いつたいを引ひ出でて入いては
 延の一いつ元暉えんげいが元暉えんげいに代つてつて所へ出ろふお振おび
 と一いつと多たち要やう計けいと生せい一いつは名なが形かたちの如ごとくは
 とも元暉えんげいが元暉えんげいに代つてつて所へ出ろふお振おび
 後のち等らが形かたちも然しか止とまらざる急いそぎ越こへ所ところへ下くだ知ちと受うて奉ほう
 前まへも計けいらひ海うみを渡るわたる一いつと形かたちと受うて奉ほう

清明軍談卷之三終

清三十三

